

近森病院救命救急センター

センター長 根岸正敏

【診療体制】

近森病院救急部門は、2011年5月に高知県から救命救急センターに指定されましたが、救命救急センターとして三次救急といわれる重症患者さんの受入れを行うのは当然のことですが、中等症から軽症も含めて、救急車やヘリコプターで搬入される患者さんから、自力で受診される患者さん（walk in）まで、あらゆる状態の患者さんを受け入れる体制を継続しています。救急患者さんに対しては緊急度・重症度から優先順位を判断したうえで救急専従医師による迅速な診断と治療が行われます。また walk in 患者さんについても、訓練を受けたトリアージナースが、患者さんの状態を判断して治療の優先順位をつけ、これに基づいて医師が対応します。そして初期診断・治療により患者さんの状態の安定化を図った後に、さらに各診療科専門医師に引き継がれ、高度な根本治療・その後の入院治療が行われます（いわゆる北米 ER 型救急システムと呼ばれており、当院では2002年からこの体制を導入し現在も継続しております）。なお、心肺蘇生後、多発外傷、低体温、熱中症、敗血症など重症感染症、破傷風などの特殊感染症、一般外傷などは、そのまま継続して救急科での入院治療を行っています。

重症患者さんの入院を受け入れる救命救急病床は18床あり、ほかに高規格のICU（集中治療室）、時期や患者さんの状況により若干の床数変動はありますが、HCU（高機能治療病床）、そして一般病棟とそれぞれ患者さんの状態に適した病棟での入院治療が行われます。入院病棟の決定は、患者さんの病状を十分に把握した上で、担当医師、ベッドコントロールナース¹（BCNS）、ER リーダー医師、リーダー看護師との協議により決定しています。COVID-19などの感染症に対しては、2021年から段階的にERの4床を陰圧仕様に追加整備（合計7床となります）し、病棟では救命救急病棟の陰圧室を使用しおもに重症、中等症患者さんの外来および入院治療に対応しています。

集中治療室、救命救急病棟は、日勤帯はおもにER医師が、また休日夜間帯は各診療科の応援も得て24時間専任医師が常駐する体制をとっています。またICU、HCUにもそれぞれ24時間体制で担当医師が常駐しています。各診療科がオンコール体制をとり、特に循環器科医師、脳卒中对応医師は24時間院内に待機しており、心血管疾患、脳卒中に迅速に対応することが可能です。このような体制の中で、2025年の救急車の受入数は、四国でもトップクラスの6,804件（図：1,2）でした。高知県全体の救急車出動件数はやや増加傾向でしたが、当院での受け入れは昨年とほぼ同様となっています。全体的に高齢化、軽症化の傾向があり、日勤帯は2次医療機関での受け入れが増加していることによると思われます。Walk in 患者さんは12,623人で、こちらも昨年とほぼ同様の件数でした。全体での入院は前年とほぼ同様で3,719件、心肺停止は232件を受け入れており、過去最多を記録した昨年度をさらに更新しています。特に高知市内ではおよそ60%を当院で受け入れています。また、応需率に関しては、2025年は平均では85%と昨年に比し若干の改善がみられました（図：3,4）。これまで特に冬場では高齢者の肺炎などの感染症が多く、これに伴う入院期間の延長、ベッド不足などがありましたが、不応需例を詳細に分析し、その対策に努めてまいりました。連携搬送（いわゆる下り搬送）として、まずは、可能な限り受け入れに対応して、オーバーナイトで対応、その後に積極的に転院を進める方針としていま

¹ 「ベッドコントロール」＝「病床管理」といわれる。空いているベッド数や退院予定患者数を把握し、スムーズな入退院を可能にするため、またより多くの患者さんに安全で質の高い医療ケアを提供するための病床管理担当看護師を「ベッドコントロールナース」という。

す。

一方で麻酔科あるいは当該科の対応が困難な事例はやや減少し、各科の協力により緊急手術の重複にも対応可能となってきました（図：5）。

救急車受入れ要請では、総数は昨年よりやや減少しました（図：6）。高知県全体での救急車出動件数はやや増加で、3つの救命救急センターへの搬送はやや減少傾向にあり、病状に応じた適正な医療機関への搬送が増えたものと思われます。患者さんの重症度別では、軽症（外来での処置、通院で可能）は39%、中等症（手術や入院が必要であるが、一般病棟で対応可能）が29%、重症（ICUなどの重症対応病床への入院を要する）が29%と昨年度とほぼ同様の傾向でした（図：7）。重篤患者さんの受け入れ数についても、中四国でもトップクラスとなっています。

ヘリ搬送（高知県DRヘリ、高知県防災ヘリなど）患者数は90件で26件の減少でしたが、最近では愛媛県など県外からのヘリ搬送も受け入れています。ドクターカーの出動は101件とわずかに増加となりました。ヘリは天候や時間に影響されるため、その分をドクターカーで補完している状況です。疾患別ではともに循環器系疾患、脳卒中、外傷症例が多くなっています（図.8,9）。

救命救急センターの医師は根岸、井原、三木、矢崎、久、立道、小林、飯沼、川瀬、吉村、廣瀬、野村、宮田と13名の救急科専従医師に加えて、内科系医師および各診療科からの応援医師、研修医4～5名での診療体制をとっています。再診処置のみの患者さんには、外科、形成外科が午後から専門外来で対応する体制を維持しています。また医師の働き方改革に合わせて、救急科医師は当直体制を敷き、全勤務帯に救急科医師が常駐しており、他の診療科については、直ちに対応可能なオンコール体制をとり、24時間のバックアップ体制がとられています。

看護師は、野瀬ER看護師長、萩原救命救急病棟医師長を中心に、ER、救命救急病棟、放射線部門、手術部門の看護師など救急に精通したスタッフが丸ごとになって看護にあたっています。また手術部とも密な連携を取り、ERでの超緊急手術（ERでの緊急開頭、開腹術など）などにも迅速に対応できるようになっています。

また全国的にも先駆けとなった院内救急救命士は、数名の異動はありましたが、2025年は12名が勤務しており医師や看護師とともにドクターカーやヘリ搬送患者受入れを中心として活動し、さらに救急患者さんの初期対応の診療補助業務も行っています。また、救急救命士法の改正により、その活動の場が入院するまでの救急外来にまで拡大されたことで、当院でも2023年から院内MC（メディカルコントロール）委員会を立ち上げ、事前教育を行ったうえで、医師の包括的指示による28項目にわたる救急救命処置の実施を開始しています。今後はこれらの処置をしっかりと検証するとともに、2026年には、高知県救急医療協議会とも連携し、特定行為（静脈路確保、輸液、薬剤投与など）にまで広がっていく予定です。また、2022年5月から始まった高知市消防局と連携したWS（ワークステーション）事業（この事業は、救急隊が院内に待機し出動要請の際に当院の救急科医師と一緒に同乗して出動するものです。医師が同乗し現場に臨場することにより重症患者さんでは必要な処置等のアドバイスが可能であり、また安定した傷病者対応に対しても、適宜指導をおこなうことで、傷病者の予後の改善をはかり救急隊の知識や技術の向上をはかるものです。）も継続して行い、2025年は高知市北消防署と連携した活動を行いました。来年度も継続して行う予定です。

【教育】

ERスタッフを中心に、AHA（米国心臓協会）認定のBLS、ACLSコース、日本救急医学会認定のICLSコース、JATEC（外傷初期診療）、JMECC（日本内科学会認定内科救急・ICLS講習）やDMAT研修（災害医療）などの各講習会にもインストラクターとして積極的に参加しております。コロナ禍の名残でのWEB開催により、以前より参加者が増加している傾向にあります。当院では、初期研修医、救急科専攻医など若手医師も積極的にインストラクター取得を目指して日々勉強しています。その他にも院内勉強会も定期的に開催し、最新の知見を皆で共有

し、日々の臨床に生かしています。学会活動では、日本救急医学会、日本集中治療医学会など全国レベルの学会にも積極的に参加、発表しています。学生の実習においては、高知大学、岡山大学、群馬大学、東京女子医科大学をはじめとする各地の大学からの医学生、看護学生などを積極的に受け入れています。ほかに救急救命士再教育、救急救命士養成施設からの学生、その他の職種においても、多くの医療従事者の養成に力を入れています。

【災害関係】

2010年に高知県から災害拠点病院に指定され、その役割を果たすために、近森病院の災害対策委員会、高知県および高知市の災害関係機関とも連携をとりながら、2025年も各種の災害訓練や講習会等に参加しています。COVID19感染も落ち着いてきたために、徐々に以前の規模に戻しつつの開催となりました。2023年1月の能登半島地震では、当院DMAT隊（災害医療支援チーム）が出動し、被災地医療機関の支援活動に当たりましたが、その振り返りも行い、当院での対応、訓練に生かしています。日本中のどこにでも起こり得る大規模災害に備えて、そして迫りくる南海大地震に備えて、さらに絶え間ない訓練を続けて行くつもりです。また、2025年は、近森病院のみならず、近森リハビリテーション病院、近森オルソリハビリテーション病院を含めたグループ全体のBCP（事業継続計画）の作成も行いました。今後は具体的な対応マニュアルの作成などを進める予定です。

2011年5月に当院救急部門は高知県から救命救急センターに指定され、16年目を迎えました。この間、『いつでも、誰でも、どんな疾患でも』をモットーに救急患者さんの受け入れを行い、救急車の受け入れ件数、重篤患者数ともに四国内の救命センターではトップクラスの受け入れ実績となっています。救急車の受け入れ件数に関しましては、各医療機関の事情もあり一概に論ずることはできませんが、心肺停止をはじめ重篤患者さんを多く受け入れできたこと（図.10）は、3次医療機関としての責務を果たせたのではないかと考えています。今後も救命救急センターとしての役割、責務をしっかりと自覚して、さらなる医療の質の向上に向けて精進してまいります。

今後も、私たちは患者さんに寄り添い、「命を救い、命をつなぐ」ために、最新の医療技術なども積極的に取り入れ、高度で質の高い医療提供を通して、高知県民のために精一杯努力してまいります。

統計資料

図1：年別の救急車搬入件数（1993年～2025年）

図2：2025年 月別救急車搬入件数

図3：2025年 月別救急車応需率

図4：2024/2025年 月別救急車応需率比較

図5：2025年 不応需症例の内訳

図6：2025年 救急車受け入れ要請件数

図7：2025年 救急車受け入れ患者重症度

図8：ドクターヘリ搬送受け入れ状況

図9：ドクターカー出動状況

図10：来院時の年間重篤患者数（令和7年1月～12月）

図.1 年別 救急車搬入件数

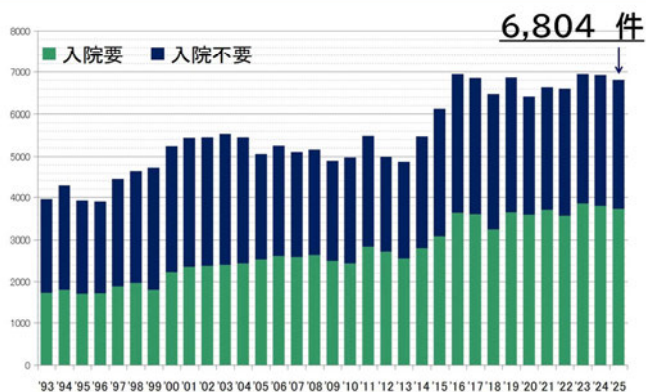


図.2 2025年 月別救急搬入件数

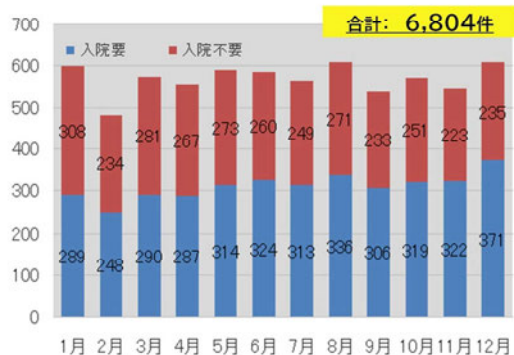


図.3 2025年 月別救急車応需率

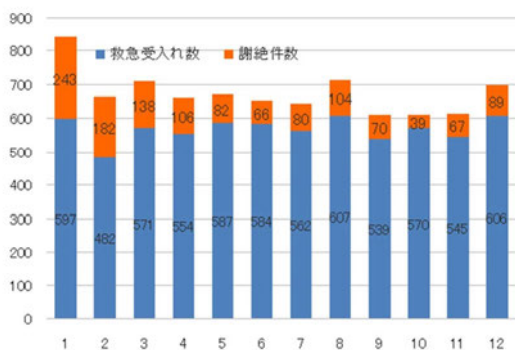


図.4 2024年/2025年 月別救急車応需率比較

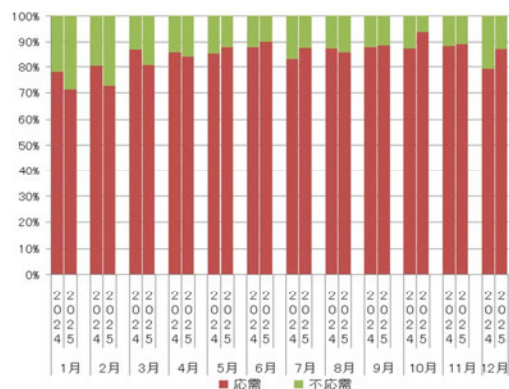


図.5 2025年 不応需症例の内訳

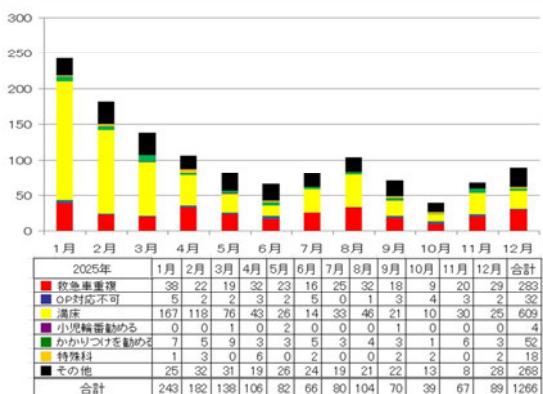


図.6 2025年 救急車受入れ要請数

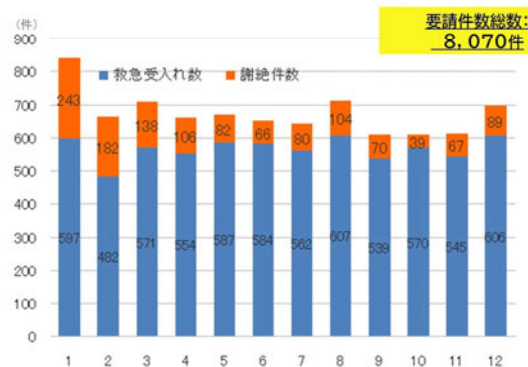


図.7 2025年 救急車受入れ患者重症度

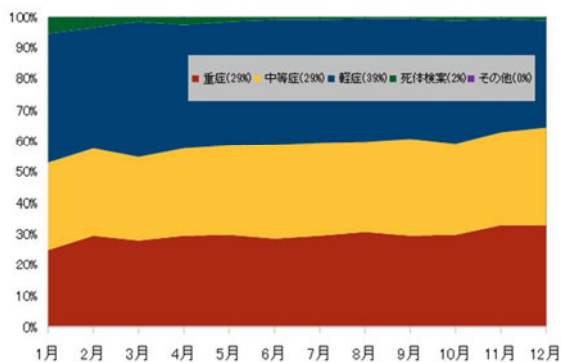


図.8 2025年 ドクターヘリ搬送受入状況

2025年1月～12月

ドクターヘリ搬送受入件数: 90件

高知県 ドクヘリ		高知県 防災ヘリ		県外 ドクヘリ	
81		6		3(愛媛)	

図.9 2025年 ドクターカー出動状況

2025年1月～12月

ドクターカー出動件数: 101件

病院間搬送 : 75件 中継乗込み : 3件
中継搬送 : 17件 現場出動 : 6件

疾患別

循環器系	: 40件
呼吸器系	: 10件
消化器系	: 11件
中枢神経系	: 26件
外傷ほか	: 6件
その他	: 8件



図.10 2025年 来院時の年間重篤患者数

[illegible]

学術発表・講演会等

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
南海トラフ地震臨時情報「注意」の経験と「警戒」への訓練 ～高知県災害医療コーディネーター・病院災害対策委員長として～ ・「災害発生時の被災地における支援者被災者間のハラスメント事案に関する調査と研究（仮）」	井原則之	第 30 回 日本災害医学会学術総会	2025 年 3 月 6 日～3 月 8 日 名古屋市 名古屋市国際展示場
せん妄に対する Multicomponent interventions の実践	矢崎知子、久雅行、三木俊史、小林海里、飯沼未来、立道佳祐、根岸正敏	第 52 回 日本集中治療医学会学術集会	2025 年 3 月 14 日～3 月 16 日 福岡市 福岡国際会議場 他
メトホルミン過量内服による正常血糖糖尿病性ケトアシドーシスを伴う乳酸アシドーシスで心肺停止に至ったが救命に成功した 1 例	川瀬博也、矢崎知子、廣瀬海帆、立道佳祐、三木俊史、飯沼未来、小林海里、久雅行、吉村和樹、井原則之、根岸正敏	第 53 回日本救急医学会総会・学術集会	2025 年 10 月 28 日～10 月 30 日 大阪市 大阪国際会議場
Ⅱ型呼吸不全で搬送され人工呼吸器管理後に診断された高齢者神経筋疾患の 3 例	吉村和樹、川瀬博也、矢崎知子、廣瀬海帆、立道佳祐、三木俊史、飯沼未来、小林海里、久雅行、井原則之、根岸正敏	第 53 回日本救急医学会総会・学術集会	2025 年 10 月 28 日～10 月 30 日 大阪市 大阪国際会議場

論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	巻・号 ページ
息苦しさはどこから来るのか？ ～頻回受診者の呼吸苦について～	小林海里・竹内慎哉（共著）	Emer Log 2025 年春季増刊 メディカ出版	P65～P67

講演

演題	発表者 共同研究者	講演会名	開催
超急性期における発作管理と薬剤の適正使用	根岸 正敏	てんかん重積アップデートセミナー （アルフレッサファーマ株式会社主 催）	2025 年 4 月 18 日 あわぎんホール会議室 I
高知県および近森病院の救急医療について	三木 俊史	旭化成ファーマ株式会社 研修会	2025 年 9 月 26 日 旭化成ファーマ株式会社